

## LA COSCIENZA DELLO ZEN Italo Svevo e l'arte di smettere di fumare

## ゼンの意識——イタロ・ズヴェーヴォと禁煙の嗜み

報告 石井沙和

「煙草を吸わぬ者にはおよそ味わい尽くせない小説」とある批評家に言わしめた『ゼーノの意識』（一九二三）の作者、イタロ・ズヴェーヴォ Italo Svevo（一八六一—一九二八）の博物館があるのは、北イタリアの街トリエステ。イタリアン・ブーツのフィンガープルプの先端にあたる。アドリア海をはさんでイタリア半島の対岸にあるトリエステは、工業原料を卸す寄港地、イリー社に代表されるコーヒー、国際理論物理学センター、セーリングの町である前に、世界有数の文学の町である。十九世紀には文化の境が曖昧になる国境の町はハプスブルク帝国下で繁栄し、船で溢れ人でごったがえし、ゲルマン、イタリア、スラヴ、ギリシャ、アルメニア、トルコ、イギリス、ハンガリー等、様々な国籍、宗教、文化の混淆する地点だった。その時代、船舶用塗料を扱うビジネスマンをしながら執筆していたのがズヴェーヴォである。

二〇一四年四月二十二日、総合文化研究所にてズヴェーヴォ博物館館長のリツカルド・チェパック Riccardo Cepach 氏が講演会『ゼンの意識——イタロ・ズヴェーヴォと禁煙の嗜み』を行った。チェパック氏は館長として様々なイベントを企画し、ズヴェーヴォの魅力を伝えるため精力的に活動している。他のトリエステの人々同様、イタリア人にしてはかなり背の高

い彼は今回その足を日本までのぼした。タイトルでは『ゼーノの意識』の主人公ゼーノの名前と「禅」を遊ばせている。このタイトル、トリエステと日本のつながりから見れば、そこまで無理矢理なものではない。決して「禅」の思想が広く知れ渡っていたということではなく、例えば港町として、オーストリアの主要航路を運営していたロイド・トリエステイノ社が日本へも運航していたり、ズヴェーヴォの蔵書から浮世絵や風俗図絵が発見されたり、というレベルの話だが、冗談好きのチェパック氏らしい。

「禁煙の嗜み」とタイトルが示すように、講演の主眼はズヴェーヴォによる文学的発明「最後の煙草」である。

『ゼーノの意識』の主人公ゼーノ・コシーニは煙草をやめるために精神分析治療を受ける。禁煙を何度も誓いながら何度も失敗するのはなぜか。不成功と神経症の関係は何なのか。それは「最後の煙草」が、宣言することが破ることにつながり破るとまた宣言するという、逆説的に循環する仕組みを持つからだ。ゼーノは常にスタート地点に戻らざるを得ず、つねに発展段階の状態に置かれる。ひとたび禁煙したら、夢にみた意欲的で意思の強い、自分の神経と運命をコントロールできる成熟した人間になるのだろうか、そんな話はある得ない。しかしそう

した疑念が、自身を悪癖へ縛りつける原因となる。ならば常にこれから開かれゆく進化の過程に在ると思うほうがよい。これがゼーノの現実検討からの防護策、またズヴェーヴォの「試作段階の人間」という理論で、自分の力を引き出し生存闘争において逆説的に勝利するには、自分の力を使い切らずに大部分を温存し、流動的で決して特定できないあらゆる可能性に対して常に対処できる、いわば開かれた状態であるべきだ、という考えだ。

「開かれた状態」について、「父の死」という章でゼーノはさらに深く考察する。親子が共に過ごす最後の夜、父は息子に自分が人生から得た偉大で単純な真実、「生きる知恵」を授けようとする。しかしそのための言葉がみつからない。「不思議なものだ！ 何も言つてやれないのだ、まったく何も」という父親の声から、ゼーノはとてもシンプルでわかりやすい、でも言葉では伝えることのできない最後の真実を聞き取る。そして反芻する。「こうして書いている今、父親と同じような年齢になり、私はようやくわかる。人間は自身の最高の知性を表す感情を持ち得る、その強い感情でもってしか表せられないものを。だとすれば、力強く息をし、自然全体をありのままに、絶対的なものとして、与えられたまま受け入れ賛美するのだ。そうすれば神の創造そのものの叡智が立ち現れる。」究極の知恵の獲得には完全に開かれた意識が必要だと、ゼーノは悟る。

「もつと集中するため二日目の午後はイゾンツォ川のほとりでひとり過ごした。最も精神集中を高めるには流れる水を眺めることだ。」「それこそまさに瞑想だった。貪欲な人生の中の希有な一瞬、真に偉大な客観性でもってやっと自身を犠牲者だと

する思考や感情が止んだ。木漏れ日でそれは甘美にきらめく緑の中で自分の人生と病までもが心地よくと感じられた。」「自分の人生と病を振り返ると愛おしく感じた、わかったのだ！」

ゼーノの逆説は、対立する概念が生み出すまやかしを明らかにし、すべてが表裏一体のものであることを示す。批評家サッコーネ (E.Saccone) は言う。「瞑想やゼーノの理論、善悪や病と健康、強さと弱さは表と裏をなして分ち難く、メビウスの輪のようになっている。一方は一方なしでは存在しない。眠りのない覚醒がないように、また昼のない夜がないように。」サッコーネがメビウスの輪に例えたゼーノの世界観は、「最後の煙草」の逆説的な循環性、永劫回帰、はたまた禅の円相にも繋がる。

チェパック氏が念を押すように、もちろんズヴェーヴォが直接禅の思想に触れた証拠はどこにもない。ズヴェーヴォの義兄弟ブルーノ・ヴェネツィアーニが、古代中国の陰陽占いの本をイタリア語に訳した人物であるということを考えて、幾らかの知識を得ていたかもしれないが、作家お気に入りのシヨーペンハウアーやニーチェを読むことで掴んだことのほうが多いと考えるほうが妥当だ。

相反することが平行して存在するのではなく、同時に起こっている。喫煙家であり禁煙者だったゼーノは、治療手段である精神分析が、かえって絶えず気に病み無為で有害な吟味を行わせ、現在という単純に存在している状態から目を背けさせることになるかと悟る。『ゼーノの意識』が東洋的な思考を含むかどうか、禅の思想と重ね合わせてよいか、確かに危ない試みだ。しかし、なんらかの暗示的な接点を模索することはとても魅力

的なことでもある。

そう締めくくった館長が来日した四月。世界文学全集に収められたズヴェーヴォの最初の翻訳、一九六五年の「わが老衰」(河島英昭訳)から半世紀ほど経つてのことである。